

小野市史活用委員会絵図部会 編

『小野市絵図集』

小野市 2010年6月

本編313頁＋絵図編67頁＋付図 7,000円

本書は、兵庫県小野市における市史編纂の過程で調査された村絵図を収めた絵図集である。本書で取り上げられた村絵図は、江戸時代から明治初頭にかけての計47葉であり、絵図編にオールカラーで掲載されている。本編では、総説・テーマ解説に続き、個々の絵図についての解説が行なわれている。

冒頭の大山喬平氏による総説「小野市域に残る村絵図」によれば、村絵図の現物を目にしながら、地理学と歴史学の担当委員たちが議論を重ねて編集されたのが本絵図集であるという。その理由として、誰もが読み取り可能な資料であるという絵図の特色があげられている。実際、個別絵図解説においては、一枚の絵図に対して、地理・歴史の両面から複眼的な解説が施されている。さらに、「現地を良く知っている人物こそが、そこに何気なく描かれている標識の意味を的確に読み取りうるであろう」（本編4頁、以下に記した頁数もすべて本編のもの）とし、専門家だけでなく、そこで生活している市民にも絵図解説への参加を語りかけている。この態度は、専門家の自己満足で終わるのではなく、住民に開かれた自治体史編纂を目指す上で、肝要な点であろう。

続くテーマ解説の目次を並べると、「小野市域は段丘のくに」（田中眞吾氏）、「中世荘園と近世絵図」（野田泰三氏）、「中世荘園絵図から見た小野市内の近世絵図」（藤田裕嗣氏）、「天保国絵図の調進と在地村絵図の作成」（石野茂三氏）、「地租改正事業による絵図の作成」（奥村 弘氏）となる。自然地理・中世史・歴史地理・近世史・近現代史を専門とする各氏によって、小野市域の特徴や、そこに残された村絵図の歴史的背景などがまとめられている。このうち、歴史地理学の視点に立脚した藤田氏の解説では、中世荘園絵図の例から絵図解説の基本が説明され、荘園絵図と江戸時代の村絵図との比較対照がなされている。

本編および絵図編では、市域を流れる河川（市域中央西寄りを加古川が南流し、東西からの支流を集める）によって区分された6つの地区ごとに

絵図が配列されている。絵図の読解を助ける本書の工夫の一つは、絵図編が別冊にされている点にある。通常、こうした絵図集では、冒頭のカラーページに絵図が収録され、その後解説が続いて一冊の本をなす例が多いように思われる。しかし、この形では、カラーの絵図と解説とを見比べたい場合、本を一々めくる面倒が生じてくる。この点、本絵図集では、カラーの絵図を傍らに置きつつ、当該絵図の解説を読むことができる。また、本編の個別絵図解説には、文章による解説の他に、各々の絵図をトレースして文字を翻刻した解説図と、当該地区の地形分類図、そして絵図に関連する総計101枚の現地写真などが配されている。

もう一つの工夫は、「小野市の地形分類図（改訂版）」を付図としている点である。本図は、編集委員の一人である田中眞吾氏が、『小野市史第4巻』（1997年）の付図として作成した地形分類図を改訂したものである。縮尺は2万分の1で、小野市全域およびその周辺の地形分類をカラーで示したものである。この図によって、村絵図に描かれた個々の地区がどういう自然環境のもとにあるのかを、明瞭に読み取ることが可能である。他方、評者のように小野市に土地勘のない者にとっては、地区ごとの位置関係を知る上でも非常に有益である。

以下、いくつかの絵図を例にとって、本書の内容を垣間見ていきたい。小野市域は、中世に東大寺領大部荘が存在していたことで知られ、中世史料や現況調査と合わせて、詳細な景観復原の試みがなされている。野田泰三氏のテーマ解説によれば、本書所収の江戸時代の村絵図のいくつかに、少なくとも室町時代に遡り得る水利や開発のありようを読み取れ、江戸時代に大部郷の呼称で引き継がれた大部荘という地域単位の影響は、今なお民俗・社会慣行に見受けられるという。江戸時代の村絵図を、さまざまな時代の多様な資料と突き合わせることで、長期間にわたる一地域の通時的な変化を追究できる恰好の事例であろう。この大部荘域には、鎌倉初期に東大寺再興を果たした俊乗坊重源が建立した浄土寺があり、「浄土寺境内に立って加古川を臨んだ際、眼下に見はるかす地」（33頁）がほぼ大部荘の範囲になる。本絵図集に収められた「浄土寺絵図」（江戸末期ないし

明治初期)には浄土寺の伽藍とその周囲が描かれており、解説では「現在では想像しがたい浄土寺の往時の景観や周辺の景観構造を鮮やかに示すものとして、貴重な絵図」(117頁)とされている。評者の現地調査における実感としても、村や町における宗教のあり方をとらえる上で、この時期の絵図は大きな武器となることが多い。そうした要素も含め、本荘域の村絵図や水利絵図は、さまざまな読み取りの可能性を秘めた存在といえよう。

次に取り上げるのは、享保17(1732)年の「山田村絵図」である。山田村の地形は、加古川左岸の小支流である山田川河谷とそれに沿う段丘地形からなる。本絵図の表題は「播州加東郡山田村御新開絵図」となっており、山田川最上流部における新開畑を示している。絵図中、新開畑には1番から225番までの番号が付されており、一筆ごとに所有者と面積が記入されている。さらに、翌享保18(1733)年に作成された新田検地帳と組み合わせると、それぞれの地目や小字名も判明する。本書には、「山田村絵図の新開畑一覧」(208~209頁)と「新田検地帳の新畑一覧」(211頁)という2つの表が掲載されており、詳しい照合が行なえる。とくに注目されるのは、枝分かれした山田川源流部の谷によって開析された十数カ所の高所段丘面群と新開畑との対応関係であり、「自然界の機構によって分断・孤立した個々の台地面上が、それぞれ、「新開」の対象とされた台地面の位置と形状」(202頁)になっている点である。本検地時における山田村新田の石高は132石余で、これは江戸時代の小野市域における最大規模の開発とされている。山田村では、天保3(1832)年の溜池築造によって本絵図に描かれた新開畑の多くが水面下に没しており、この点からも本絵図の重要性が指摘されている。

さて、本書の編纂には、上記以外に、もう一人の地理学者が関わっていた。それは、2007年に逝去された久武哲也氏であり、本書冒頭の総説には、久武氏が本絵図集作成に意欲的であったことが述べられている。本書中、久武氏の執筆になる唯一の部分は、天保8(1837)年の「池田村絵図」に関する個別解説の一部である。池田村は、加古川支流の東条川沿いの低地と、そこに注ぐ池田谷

川の河谷に位置している。本絵図は、天保国絵図改訂用に作成された村絵図の控えとみられている。ここで久武氏が着目したのは、段丘上にあった池田村にとってきわめて重要であった溜池のありようである。行論の詳細は省くが、溜池が「砂防池」でもあった可能性や、時間の経過とともに「土砂の流入で溜池が消え耕地に変わっていった」(263頁)ことが説明されている。一枚の絵図を丁寧に読み解いたこの解説は、ダムの堆砂など今日の治水・治山をめぐる諸問題を考える上でも示唆に富んだ見方といえよう。

本書の末尾近くにあるのが、小野市域で最も古い江戸時代の絵図とされる元禄15(1702)年の「久保木村絵図」である。久保木村は東条川下流左岸の低地域にあり、本絵図は東に隣接する下番村との境界争いと関係して作成されたと考えられている。この絵図には多くの貼り紙がつけられており、溜池の大きさ・面積に関する注記のほか、民俗行事についての注記もある。それが「地藏堂屋敷、毎年正月三日地おこし仕候」と、「毎年七月廿四日、愛宕様へ火とほし申候」という2枚の付箋である。本書の解説に従えば、「この民俗事象を貼り紙で注記することによって、その行事が行われる場所は、村内であることをさりげなく主張している」(295頁)と想定できる。総説でも述べられているように、こうした行事の存在が絵図上に明記されることは稀であろうし、当地で「地おこし」や「愛宕講」の現存が確認されていることから、これらの年中行事の継承のありようも興味深い。

以上、絵図編に収められた多くの絵図のうち、いくつかをかいつまんで紹介してきた。本書全体に通底しているのは、抽象的に思考を語るのではなく、絵図をして具体的に語らしめる姿勢であるように思われる。一枚の絵図を熟覧し、現地の情報と照らし合わせつつ、絵図が示すものを丁寧に読み解いていく過程そのものが、本書を読む醍醐味であろう。現地未見の評者としては、いつか本絵図集を持って小野市を歩いてみたいと強く感じた。

本書が多くの人の眼にふれ、絵図のもつさまざまな魅力が広く伝わっていくことを希望したい。

(三木一彦)